
感想学校

sampledog

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

感想学校

【Nコード】

N8746L

【作者名】

sampledog

【あらすじ】

感想を述べる学校です。

生徒皆でやるので感想かどうか怪しいかもしれません。

このキャラ達をほんの僅かでも登場させていただけたら嬉しいです。別にウゼーからいいわって方はスルーしてください。

開いても意味がありません

[illegible]

キンギョ様 いつも面白いハルトをありがとうございます（前書き）

勝手にこのような物を作り申し訳ございません。

もし、こんなのを残すんじゃないかねえ！

と思いましたら。お手数ですが私の活動報告の方に書き込みください。

キングヨ様 いつも面白いハルトをありがとうございます

とある小学校2時間目 社会

先生「うーし、今日は『人間やめましたから……』についてだ」

純真「先生！ ハルトって襲われたシーンありますが何でカットされてるんです？」

先生「…… 本人に答えてもらえ」

純真「分かりました！」

先生「よし、まず好きなキャラから言ってくか？ 青木！ お前は誰が好きだ？」

青木「青木です」

生徒達「……？」

先生「嫌、自分の名前じゃなくてだな……」

青木「青木です！」

先生「もういいや、次佐々木」

佐々木「ニートです」

先生「…… 実際は違う名前だからな」

い
!
!
L

先生「なるほど」

[illegible]

先生「女の子なんだから落ち着きなさい、冷静さを保つんだ」

優里「チビニートオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

先生「雄たけびにしか聞こえネエ、よし次夜佐」

夜佐「ユムアさん」

先生「ほう、どうして？」

優里「ライさん――」

夜佐「一緒に庭をつくりたい」

先生「好きそうだもんな夜佐」

夜佐「こくり」

先生「よし、次杠」

杠「エアサン」

先生「なるほど」

杠「カタカナ イツシヨ」

先生「……エアさんすいません、不甲斐ない生徒で」

杠「？」

先生「最後純真」

純真「柊さんです！」

優里「ピーちゃんああああ、元気かああああなああああああ
！」

杠「ナクナ」

先生「前回主人公だもんな」

純真「チビ神の最後の展開が！ 柊さんが可哀想で可哀想で！」

先生「今見えてるからいいじゃん」

純真「なんて事を！ あの時は涙で前が見えませんでしたよ！」

先生「はいはい」

純真「……先生は誰がいいんです？」

先生「未来だろ」

純真「何故？」

先生「あの鬱陶しい感じがメツチャ好きだ」

純真「先生らしいです!」

先生「はあ?」

純真「傍若無人みたいでもんね!」

先生「多分お前は色々勘違いしている」

純真「?」

先生「うし、レギュラーは全員だな、次好きなシーンについてでも訊くか」

優里「ピーちゃんが去つてくところおおおおお!」

杠「ナクナ」

先生「人間やめましたから…… からにしてくれ」

夜佐「未来ちゃんとシバル君の戦い」

先生「…… うんつと、ドッジボール大会の最後か?」

夜佐「（こくり）」

先生「どんな感じによかった?」

夜佐「仲が良さそうに見えた」

先生「そうか？ 『橋』は仲が悪そうに見えたが」

夜佐「（フルフル）そんな事は無い」

先生「そうか、次純真」

純真「僕はやっぱり襲われたところ……いたあ！」

先生「本人に訊けって言ってるだろう」

純真「分かりました！」

青木「僕は卵です」

先生「誰かフライパン持って来い」

青木「いえ、僕が卵じゃなくて『白』に貰った卵のせいで起きた白熱なシーンです」

先生「ハルトが頑張ったな」

佐々木「僕もそのシーンですね、ニートのビビリ具合が最高でした」

先生「Sか？」

佐々木「？」

先生「まだ早かったか、次三輪」

三輪「大量発生」

先生「ハルトいっぱいか」

三輪「ああ」

先生「何で？」

三輪「面白い」

先生「そうか」

三輪「……」

先生「……次杠」

杠「ユキマツリデ ムソウジヨウタイノ ハルト」

先生「ああ、やっちゃったシーンな」

杠「ソウ」

先生「……グロイが好きなのか？」

杠「ベツニ カッコヨカッタダケ」

先生「そうか、次純真」

純真「さっき言いましたよ！」

先生「無しに決まってる」

純真「じゃあ！ 偽ハルトとエアがいちゃってるところ！」

先生「お前何か狙ってないか？」

純真「ハルトは大杉さんで偽ハルトはエアさんですね！」

先生「そうだな、ハルトに何も無かったらなくつつくな」

生徒達「……………」

先生「いや、別にハルトが『過去』のせいであんなになるかはまだ分かんないからね！ ニートが多分本開かず麻雀の勉強してるから物語がクリスマスで止まってるけど、もしかしたら現実にはハッピーエンドに向ってるのかも知れないからね！」

優里「先生！」

先生「うお！ どうしたいいきなり机叩いて」

優里「優里は優里は」

先生「お…………おお」

優里「ハルトより二ハルトが好きです！」

先生「……………何？ カミングアウト？」

優里「二ハルトですよね！」

先生「俺に向かって期待の眼差しを向けるな、それで二ハルトってだれだよ」

優里「ハルト偽者に決まってるじゃないですか！」

先生「何でそうなった？」

優里「にせものはると……にせはると……にはると……二ハルト！」

先生「略しすぎにもほどがある」

優里「それに似てるなって言葉と二ハルトって似てないですか？」

先生「二文字だけだ」

純真「先生！ チャイムが！」

先生「そうか、よし並べ」

佐々木 夜佐 優里 先生 青木 純真 三輪 杠

純真「金魚さん！」

先生「キングヨさんだ」

純真「私達感想学校8人とその他もろもろは！」

先生「sampleと共に」

純真「『人間やめましたから……』を応援しています！」

先生「もちろん、チビ神も面白かったですよ」

純真「これからも頑張ってください！」

先生「礼！」

生徒全員「ありがとうございました」

先生「語り足りなかったところあるから、第二弾やるか『人間やめましたから……2』」

生徒全員「（未来さんこいつと仲良くしてやってください）」

キンギョ様 いつも面白いハルトをありがとうございます（後書き）

もしかしたらまた書くかもしれません。
その時はよろしく願いします。

ヒッキー様 ゼロって凄いですね（前書き）

勝手にこのような物を作り申し訳ございません。

もし、こんなのを残すんじゃないかねえ！

と思いましたら。お手数ですが私の活動報告の方に書き込みください。

ヒッキー様　ゼロって凄いですね

とある小学校3時間目　家庭科

先生「『開明高校生徒会録』についてやるぞ〜」

純真「先生！　何でそんなに投げやりなんですか!」

先生「2時間目でテンション高いんだよテメーら」

純真「先生！　先生も何気にテンション高かったですよ!」

先生「分かった分かった」

優里「会長きたあああああつあああつあああ!」
杠「ウルサイゾ」

先生「どうした、優里また病気か?」

優里「ロリっ子きたああああああああああ!」

先生「2時間目からよくそのテンションが持つもんだな。尊敬するわ」

青木「会長の本名なんでしたっけ?」

三輪「佐倉　芽」

青木「そうだった、メエとしか覚えて無くてさ」

佐々木「僕もメエとしか覚えてなかった」

先生「はい、こっち向け！」

純真「先生！ ゼロの本名分かりますか？」

先生「……………」

純真「……………」

先生「レイヤ？」

三輪「高月 零夜」

生徒全員「……………はあ」

先生「ととととりあえず、好きなキャラ言ってくぞ！ 青木！」

青木「マジさんです」

先生「青木は呼び捨てなのにマジさんはさん付けか？」（注 2 時間目の話です）

青木「いや、青木は親近感が沸いたからです」

先生「そうか、でマジさんだったな」

青木「そうです」

先生「本名なんだっけか」

三輪「真島 行人」

先生「そうそう、でどこら辺が好きなんだ？」

青木「ギャップが中々良い味だしてるとは思いませんか？」

先生「うんまあ、そんな感じはするけどな……次佐々木」

佐々木「特に居ないんですね」

先生「そうか、何でだ？」

佐々木「まともな人が居ないんですよ」

先生「それは否定できないな」

佐々木「しいて言うなら、榊さんですかね」

先生「木神菜月か」

佐々木「きしんなつき？」

先生「いや、こっちだと性格的に合ってそうだからこっちで呼んでる」

佐々木「そうですか、で何故かと訊かれると困るのですが……なんとなく気が合いそうな気がして」

先生「やっぱり、こいつにはSの血が……！」

佐々木「？」

先生「次三輪」

三輪「高月 零夜」

先生「言うと思ったよ」

三輪「ふん」

先生「個人的にはあまり好きにはなれないんだよな、あーゆうハレムエンド目指せる奴は」

純真「先生モテませんしね！」

先生「純真、ちょっと太平洋に沈んでる財宝探してきてくれない？」

純真「行つて来ます！」

先生「次優里」

優里「先生ええ！」

先生「嫌な予感しかないのだが」

優里「僕っ子って良いよね」

先生「どこ見て言ってたんだ、窓の外見ても純真が酸素ボンベ持って

走ってく姿しか見えないじゃないか」

優里「会長さいきよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおお！」

先生「だから何故叫ぶんだ？」

優里「人は萌えるんだアアアアあつあああああああああああああ
あああああ！」

先生「何に変身するんだよ、3分しか地球守れないヒーローになる
つもりか？」

優里「優里は会長を守るヒーローになります！」

先生「次夜佐」

優里「スルーキタアアアアアアアアア！」

夜佐「ラブちゃん」

先生「三輪」

三輪「長峰 愛佳」

先生「やっぱり大人しい人か？」

夜佐「（こくり）」

先生「色々言いたい事があるがやめといたほうがいいような気がする

る
』

先生「次杠」

杠「シキ サリ」

先生「死期去り？」

杠「シキサリ」

先生「三輪！」

三輪「風紀部、部長 志木 佐里」

先生「何故まだあまり活躍してない生徒を？」

杠「カノジョカラ トクベツナ ナニカラ カンジタ」

先生「堅気じゃない杠には何か分かるんだろう、流石だな。本当かどうかは全くもって知らないが」

杠「……フ」

先生「『怖っ』 最後純真は……太平洋に沈んだんだったよな」

杠「ツレテクル」

先生「ワリイな……次はそうだな……質問受け付けるとか言ってたから気になる質問でも言ってくか」

三輪「紙にまとめておく」

先生「サンキュウー、俺が後で質問箱中つつこんどく……青木からだな」

青木「マジさんって兄弟居るんですか？」

先生「居たような、居なかったような？」

青木「気になりますよね」

先生「ちよつとな、次佐々木」

佐々木「榊さんはどこで趣味（ストレス発散）してるんですか？」

先生「Sは黙ってる」

佐々木「え？ ええ？」

先生「次優里」

優里「会長は何で可愛いんですか？」

先生「私欲にまみれた質問だな」

優里「気になりませんか？ 何であんなに可愛いのか」

先生「俺はロリコンなどでは無いのね」

優里「本当かなあ」

先生「ロリコンだったら、小学校の先生を大人しくやっとなんわ」

優里「次夜佐」

先生「……ム力つく野郎だなオイ」

夜佐「会長が好きな人ってゼロなんですか？」

先生「三輪ああああ！」

三輪「わかってます!!」

先生「マイネームだ！」

三輪「ゼロの部分消去完了しました！」

先生「危なかったぜ、質問ごときで愛の告白をさせるわけにはいかぬからな」

夜佐「ごめんなさい」

先生「いや、別に夜佐を攻めた訳ではない」

夜佐「はい……」

先生「……次は……二人とも太平洋だったな、じゃあ三輪」

三輪「生徒会の皆はプライベートで遊びに行ったりしないのか」

先生「なるほど、確かに皆仕事の延長としてはよく遊んでるがプライベートは無いよな」

三輪「ちよつと気になる事だ」

先生「よし、あの二人は……」

杠「コウリン」

純真「あぶし！」

先生「何故ロッカーから？」

杠「セマカッタ」

先生「だろうな」

純真「先生！」

先生「どうした？ 全身ワカメアンド貝殻人間」

純真「財宝発見しました！」

生徒全員「マジかッ！」

夜佐「真島？」

先生「金貨一枚って、なんか危ない感じするから……っおおおおお
らららああああ！」

生徒全員「金貨が窓から消えてったアアア！」

純真「先生！ 窓からゴミを捨てるのはイケないと思います！」

先生「以後気をつける。それより質問だ……」

先生が純真に説明中

純真「なるほど！ だったらゼロは鈍感なバカですかで」

先生「……………今先生許可しようかどうか凄く迷ったけど、ゼロのためだ許可しよう」

純真「杠の番です！」

杠「シキ サリ ノジョウホウ モトム」

先生「なんとまあ」

純真「先生！ チャイムが！」

先生「並ぶんだ」

純真 佐々木 夜佐 先生 優里

青木 三輪 杠

純真「何でそんなに離れるんです？」

先生「ワカメちゃんのせいだよ、とりあえずチャイム鳴るから」

純真「はい！　引きこもりさん」

先生「ヒッキーさんだ」

純真「私達感想学校8人とその他もろもろは！」

先生「sampleと共に」

純真「『開明高校生徒会録』を応援しています！　これから頑張ってください！」

先生「礼！」

生徒全員「ありがとうございました」

「マジさんって兄弟居るんですか？」

「榊さんはどこで趣味（ストレス発散）してるんですか？」

「会長は何で可愛いんですか？」

「会長が好きな人って——なんですか？」

「生徒会の皆はプライベートで遊びに行ったりしないのか」

「ゼロは鈍感なバカですか」

「シキ サリ ノジヨウホウ モトム」

先生「三輪、何で一枚の紙に書かずにばらばらに書いたんだ？」

三輪「そっちが読みやすいだろ」

先生「何で、杠のカタカナで書いてるんだ」

三輪「個性を生かすために」

先生「そうかあ」

先生「てか、質問箱どこにあるんだろうか？ とりあえず開明高校
行って来るか」

ヒッキー様 ゼロって凄いですね（後書き）

この先も作品を楽しみにしております。

それではまた感想学校と出会えたら、また会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8746/>

感想学校

2011年10月7日02時25分発行